

ティーチング・ポートフォリオ

長崎 靖子

(記入日：2024年 1月 22日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

日本語学(1)(2) (日本文化学科選択必修科目 (1)(2)合わせて4単位)、日本語教育入門 (日本文化学科選択必修科目 2単位)、日本語教育史 (日本文化学科選択必修科目 2単位)、文章表現法 (日本文化学科選択必修科目 2単位)、くずし字を読む (日本文化学科選択必修科目)、日本文化専門演習IV(1)(2) (日本語学) (日本文化学科選択必修科目 (1)(2)合わせて4単位) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

- ・母国語である日本語を、国語教育並びに日本語教育の立場から捉えることができるようにする。
- ・日本語の音声、文字、語彙、文法、並びに日本語に関する現代の諸問題に関する知識を学び、国語教育並びに日本語教育を行う力を養うことに努めている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

今回は日本語教育史の授業に関する報告を行う。

日本語教育史は日本語教員養成コースの必修科目である。授業前半では、日本語教育の歴史を中世においてはキリスト教の布教で来日した宣教師、近世においては日本との交友で来日した朝鮮通信使、ロシアで日本語を教えた日本からの漂流民、幕末明治期に日本へ来日した通訳者や宣教師等が作成した、日本語に関するテキストや辞書、文法書、また各々の学習方法を紹介した。資料に関しては、実物の他、web サイトから閲覧することのできる原本資料などを使用、また実際に各時代の日本語教育のテキストを読み解くことで、当時の日本語や日本語教育の状況がどのようなものであったかを実体験をさせた。

授業後半では、近代における外国語教授法の理論、また教授法の種類とその特徴を紹介した。方法としては、それぞれの教授法の特徴の説明を行ったあと、各教授法の理論を具現化したビデオを視聴、その後視聴した教授法に対する発表やコメントの記述等をおこなった。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

各時代のテキストに関しては、難解な部分もあったようであるが、日本語教育の資料を自らが読み解くことにより、それぞれの時代における日本語の特徴が明らかになり、歴史的な日本語にも興味を抱いたというコメントが多く見られた（エビデンス1）。

近代以降の教授法に関しては、web サイトの利用や、教授法を具現化したビデオを視聴することにより、授業評価アンケート（エビデンス2）では、各々の教授法が何を主眼として作成されたものか、またその方法論が可視化されわかりやすかったという回答を得ている。

5 今後の目標（これからどうするか）

今後はさらに学生が興味を持つことができるよう、実際の資料や、それが用意できない場合は web サイトを利用するなどして、できるだけ原本資料に触れる機会を設け、同時にその内容を読み解く時間も設けたい。教授法に関しては、よりわかりやすい説明ができるよう、自身の授業をブラッシュアップしていきたいと考えている。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 コメントペーパー（エビデンス1 非公開）
- 2 授業評価アンケート（エビデンス2 非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

眞田 尊光

(記入日：2024年2月19日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

日本文化入門 (2) (1年必修科目 2単位)、日本の美術 (1)・(2) (1年～4年選択必修科目 2単位)、日本の絵画 (2年～4年選択必修科目 2単位)、日本の仏像 (2年～4年選択必修科目 2単位)、文化財の保護と修復 (1)・(2) (2年～4年選択必修科目 2単位)、日本文化専門演習V (1)・(2) (3年選択必修科目 2単位)、文献演習 (1)・(2) (4年必修科目 2単位)、日本美術史 (2年～4年選択科目 2単位) など。

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

日本の美術作品および有形文化財について、その特徴や背景にある歴史を学ぶことを通じて、社会生活をより豊かにするための教養を身につけるとともに、日本のみならず世界の文化の多様性を把握し、他者を尊重し共存して互いに貢献する意識を身につけることを目指している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

日本美術関連の科目 (日本の美術 (1)・(2)、日本の絵画、日本の仏像、日本美術史) では、学生が作品や文化財を観察して理解する際に、デジタル画像・映像の利用だけでなく、絵画・彫刻・工芸品の実物や複製品を教室に持ち込み、学生がそれらを直に触れて学べる機会を設けている。また、同様に実物を観察する機会として博物館・美術館や寺社等での見学授業も実施している (今年度は東京国立博物館、成田山新勝寺を見学)。

さらに、日本の伝統的な画題や意匠を深く理解するため、製品のデザイン案を提出させ、外部業者の協力を得て製品化するというアクティブラーニングも試みている (今年度は日本の美術 (1) で「ふせん」を作成)。

文化財関連の科目では、地域における文化財の保護の実態を知るために現地でのフィールドワークを行うとともに (今年度は我孫子市杉村楚人冠記念館、同白樺文学館、取手市内の寺社を見学)、有形文化財 (掛軸・卷子・茶道具等) の取り扱い方について実物資料を用いて実践的な指導を行っている。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

日本美術関連の授業では、初回授業内で簡単なアンケートをとり、各授業で取り扱う分野について学生がどの程度の前提知識を持っているか測っているが、最終回での試験やレポートの解答と比較すると、受講した学生の日本美術への理解が確実に深まっていることを読み取れている (エビデンス1)。

3年生の専門演習や4年生の卒業論文においては、学生が自身の研究対象としている作品を博物館・美術館や現地で丹念に観察し、そのうえで独自の意見をまとめていることを確認できた (エビデンス2)。

日本の美術 (1) では、日本の伝統的意匠を参考にした学生のデザイン案をもとに、外部業者に委託して「ふ

せん」を作成し、学科内外に頒布した（エビデンス3）。

我孫子市や取手市の文化財見学で学んだことをもとに、文化財の有効的な活用と保存に関するレポートを課し、その内容から現実に即した理解や知識を得ていることを確認できた（エビデンス4）。

また、授業ではその時々で SNS 等で話題になっている展覧会や美術作品を紹介し、授業内容に絡めることで学生の興味関心を刺激し、自主的な学修へと発展させていることをこころがけている。今年度は「日本の仏像」において、東京国立博物館 2023 年度特別展「中尊寺金色堂」を詳しく解説したところ、授業後に学生から多くの反響を得られた。

5 今後の目標（これからどうするか）

2021 年度から、大教室での授業の際には教室前方のモニター画面を教室内の全学生に見やすくするため席の移動等を促すとともに、状況に応じて画像や映像を各自のデバイスで見られるように teams でのリアルタイム配信も試みている。しかし、現在でも一部の教室では時間帯によって wifi が不安定であったり、学生所有のデバイスに対する負担の問題もあり、まだ改善の余地がある。来年度からは、どの席からもモニターが見やすく、かつ wifi 環境が安定している教室を確保することでそれらの問題を解消したいと考えている。

また、学生が授業時間外に美術品や文化財に接する機会として、展覧会や作品の公開情報を積極的に紹介するとともに、授業の学外見学の機会も確保し、学生が楽しみつつ自主的に学修できるようにしていきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 今年度に学生が提出した試験答案とレポート（非公開）
- 2 今年度に学生が提出した卒業論文及び専門演習での発表（非公開）
- 3 ふせん（日本文化学科学生研究室にて公開・配布）

* これまでに学生案をもとに製作した作品は下記の URL 参照。

<https://www.kgwu.ac.jp/2021/09/24/%e5%ad%a6%e7%a7%91%e3%81%ae%e6%96%b0%e3%82%b0%e3%83%83%e3%82%ba%e7%b4%b9%e4%bb%8b/>

- 4 今年度に学生が発表したプレゼンテーション（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

学科：日本文化 氏名：山名 順子

(記入日：2024年 2月 29日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

近代文学概論 (選択必修科目 1～2 年前期)、近代文学講義 (選択必修科目 1～2 年後期)、日本文学史 (近現代) (選択必修科目 1～2 年前期)、日本文学と女性 (近代) (選択必修科目 2～3 年後期)、基礎ゼミナール (必修 1 年前期) 日本文化専門演習Ⅲ (近代文学) (選択必修科目 3 年前後期)、日本語と表現(1) (共通教育科目 1～4 年)、文章表現法 (共通教育科目 1～4 年)、国語科教育法Ⅲ,Ⅳ (教職に関する科目 3 年前後期) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

自らの関心や問題意識に沿って課題を設定し、適切な方法論にもとづいて解決することのできる人材の育成を教育目標とする。

具体的には日本近代文学に関する知識と理解を深めながら個別の作品の解釈を行うことを通じて、日本の言語文化・言語芸術の持つ魅力や価値を理解するとともに、多様な価値観や現代とは異なる文化への関心や視座を深化させ、他者への理解や社会奉仕の意識をもつことを目指している。

また、国語科教育法の授業を通じて、大学での学びを教育の現場で実践し、良識ある情報発信や社会奉仕を志す人材の育成を目指している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

日本近代文学に関わる授業では、毎回リアクションペーパーあるいは teams の課題フォームで授業に関する質疑や感想、授業の中で紹介した作品に関するコメントを書かせ、次回の授業開始時にフィードバックを行った。

基礎ゼミナールでは、日本文化に関わる研究の基盤を整えるため、授業外でも随時質問を受け付けながらプレゼンテーションを完成させることを心掛けた。また、日本文化専門演習では、近代文学研究のための工具書や ICT の活用法、方法論など作品理解のための議論や受講生相互の作業を重視し、teams を通じて授業の内外で受講生と積極的に交流を行えるよう工夫した。また、授業内で論

文データベースの利用法に習熟させ、実際の所蔵機関に足を運ぶなど、資料収集および選択・分析の実践に努めた。

教職に関わる授業では、複数教員による授業分担を想定したグループワークを行い、一つの教材の多角的な分析・理解や、受講生による議論・評価の機会をつくるよう工夫した。模擬授業ではオンラインツールや ICT の有効活用に焦点をあてた。模擬授業はすべて録画し、次年度の教育実習時に参考資料とするため、各受講生が自分の授業動画にアクセスすることのできる環境を調えた。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

日本近代文学に関わる授業では、回を重ねるにつれて自覚的かつ多様な作品分析を行える受講生が増加した。（エビデンス 1）。

基礎／プレゼминаールの受講生は、自力で先行研究収集を行うことができるようになり、プレゼンテーション資料をまとめることができた（エビデンス 2）。

日本文化専門演習の受講生は、文献の選択・収集・分析を通じて各人の興味に従った先行研究のまとめや研究目的の設置、仮説論証にむけた作業を積極的に行った。内容には個人差があるが、5回の資料収集の中で卒論の方向性を徐々に明らかにするなど各受講生が目標に向けて努力した（エビデンス 2）。

教職に関わる授業では、受講生が相互批評の内容を交換することを通して成果の確認と内容の改善を行うことができた。とくに、模擬授業に対する評価は、学生相互の忌憚のない意見を共有するため、学生の許可を得て実名入りの評価シートを公開・共有した。このことから、自らの意見に責任をもちつつ、批評への工夫や配慮を通して、よりよい教師像への意識を深化することができた。同時に、将来現場で必須の〈評価〉活動への自覚の育成への大きな試みとなった（エビデンス 3）。

5 今後の目標（これからどうするか）

受講生の能力を伸ばすため、teams を利用した質疑応答やフィードバックの機会を重視し、現時点では低調な事前・事後学修へのサポートを行いたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. リアクションペーパー（非公開）
2. 各受講生の作成した発表用資料（非公開）

3. 各受講生による模擬授業評価表（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

伊藤 純

(記入日：2024 年 2 月 26 日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

日本文化学科専門科目では「日本文化入門(1)」「日本の伝統芸能(1)(2)」「日本の民話・神話(1)(2)」「日本の宗教と思想(1)(2)」「日本の祭り」と儀礼」「日本風俗史」「日本文化専門演習VI(1)(2)」「文献演習(1)(2)」、共通教育科目では「民俗学」「文化人類学」を担当している。大学院では「文化人類学特論I・II」を担当している。

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生の関心や問題意識を尊重しながら、学生自ら課題を設定し、課題に対する適切な方法論を用いることができる人材を育成することが教育目標である。特に文化を取り扱う領域のため、学生が民俗学・文化人類学の知識、方法、視座を学ぶことにより、自文化および異文化、さらに自己および他者に対する理解を深めることを目指している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「日本文化入門(1)」をはじめとする講義科目では、テキストを用いながらも、写真や動画を使ったスライドを用意し、初学者でも授業内容を理解できるように工夫した。フォローアップとしてリアクションペーパーを配布し、質問があったときは、次週で回答した。「日本の伝統芸能」では、WEBで閲覧できる専門的な情報(「国指定文化財等データベース」「e 国宝」などの専門的なページや関連する動画、クラウド上の資料など)に授業時間外でもアクセスしやすいようQRコードを配布資料に掲載した。演習科目では、図書館のグループ学習室を利用したライブラリワークや博物館見学を取り入れて、学生自ら必要な資料や文献を収集できるように指導した。自主ゼミとして民俗調査実習を企画して学生を集い、事前準備・聞き取り調査・調査資料の整理・報告書作成といった一通りの調査手法を学生が経験する機会を設けた。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

「日本文化入門(1)」では、読解が難しい用語やテキスト内の不十分な説明に対しても、写真や動画などを補助的に使用した結果、自らの経験に引きつけて理解していることが確認できた(エビデンス1)。「日本の伝統芸能」では動画閲覧により、伝統芸能への関心が高まった(エビデンス1)。日本文化専門演習(1)(2)においては、学生自ら発表に必要な文献や資料の収集ができるようになり、学生相互で討議ができるようになった(エビデンス2)。民俗調査実習はその取り組みが調査地の広報や地元新聞に取り上げられ、学生じしんが社会への貢献を実感する機会になった。

5 今後の目標（これからどうするか）

事前・事後学修を促すために、基礎文献のリストを事前に配布し、読解のためのアドバイスをを行う。また、学修の成果をみるレポートの機会を増やす。学内で iPad の普及が進んでいるので、教室だけでなく事前・事後学修で利用できるように工夫していく。

エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパー（非公開）、レポート（非公開）
- 2 授業配布物 大学配布のアカウントの OneDrive に保管（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

日本文化学科

咲本英恵

(記入日：2024 年 2 月 16 日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

基礎ゼミナール〈1年必修科目2単位〉、プレゼミナール〈2年生必修科目2単位〉、文献演習(1)(2)〈4年次必修科目2単位〉、日本文学史(古典)〈1年次選択必修科目2単位〉、古典文学概論〈1年次選択必修科目2単位〉、日本文学講義〈1年選択必修2単位〉、日本文学と女性(古典)〈2年次選択必修科目2単位〉、王朝の文化と文学〈2年次選択必修科目2単位〉、日本文化専門演習Ⅱ(1)(2)(日本古典文学)〈3年次選択必修科目2単位〉、文学〈1年次選択必修科目2単位〉、キャリア・プランニングⅢ(2)〈2年次選択科目2単位〉、キャリア・プランニングⅣ(1)(2)〈3年次選択科目2単位〉、比較日本文化研究Ⅱ(1)〈大学院科目2単位〉など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

- 1) 日本文化理解の土台のひとつである日本古典文学を読解するための基礎知識を身につけ、日本古典文学に表現された価値観を受け止める寛容さを養う。
- 2) 1をもちいて日本古典文学を多角的に読み解く力を身につける。
- 3) 2によって、人間の生き方、考え方、文化の多様性について理解を促し、この多様性社会で生き抜くためのメンタリティの養成につなげることを目指す。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

日本古典文学関連の授業では、これまで日本古典文学に触れる機会の少なかった学生もいることから、まずは文学として韻・散文のおもしろさを味わえるよう日本古典文学の現代語訳をおもに扱っている。ただし、国語科教員志望者もいることから、対応古典本文を必ず提示し、現代語訳では伝わりにくい箇所について、文法や修辞法を説明しながら解説している。また、視聴覚・嗅覚資料を適宜取り入れ、現代では身近なものではなくなった日本の古い文化についてイメージを持てるようにしたり、授業内容に関連する現代漫画・アニメ・映画等と日本古典文学との比較をとおして、モノ・文化・価値観の相違を考える時間を作ったりした。そのうえで、ディスカッションやグループ発表をとおして、学生同士がさまざまな考え方や価値観を共有し、自らのそれを見直し、発想をひろげられるような時間を取り、授業のさいごに、「今回の授業で学んだこと、理解したこと」「質問」等を整理して書いてもらい、必要に応じて次回授業時にそれらを提示しながらフィードバックをしている。

キャリア関連科目でエントリーシートの添削指導を担当した際は、なるべく添削回以外の授業にも参加し、学生がどのような取り組みをし、どのような悩みを抱えながら文書を作成しているのかを実見した。それによって、添削の際に、個人によりそった指導を心がけることができた。また、必要に応じて個別面談をおこない、学生の志望する企業のHP等を見ながら企業分析の方法と一緒に模索するなど、文書作成のポイント指導などを行なった。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

日本古典文学関連の授業では、初回授業時に日本古典文学に対する簡単なアンケートを取り、日本古典文学に対する意識や知識の程度をはかっている。日本古典文学に前向きで好意的なコメントが多いなか、日本古典文学における女性差別・女性蔑視の態度について批判的なコメントも見られたが、授業が進むにつれ、女性の立場を多面的にとらえたコメントが増えていき、日本古典文学に対するイメージを変化させてゆく学生が多く見られた。

また、視聴覚・嗅覚資料を使うことによって、「むかしのもの」を、より身近で、現代に繋がっている文化・価値観として捉え、自分にかかわる問題として、さまざまなテーマを捉えられるようになる学生が多く見られ、レポートにそのことが結実したと考えている。総じて、これまで以上に古典文学に興味を持ち、日本文化学科のその他の専門領域との関連を意識できる学生が増えたと思われる。

キャリア関連科目では、添削指導は2～3回行なわれるが、初回よりも2回目、3回目と、内容が充実してゆく学生が多く、学生自身にも学びの成果を実感してもらえていると考えられる。

5 今後の目標（これからどうするか）

本学の受験科目に古文がないことから、日本文化学科に所属しながらも日本古典文学に苦手意識を持つ学生は存在する。だが、日本文化理解のため、この多様性社会を豊かに生きるためにも、日本古典文学の素養は必要不可欠である。そこで、まずは日本古典文学への興味を育てるため、大学生にとってより身近なテーマ、より読みやすい現代語訳テキストを扱いたい。そのためには、教員が学生自身にこれまで以上に興味を持ち、また、現代の若者文化・大衆文化にも視野を広げてゆく必要があると考えている（むろん、それらと日本古典文学と結びつけるための、専門分野に関する研究も深める必要がある）。

また、日本古典文学だけでなく日本文化全体を理解する一助として、長期休暇等を利用し、美術館・博物館に行く機会や、古典文学の舞台となった土地の現地踏査する機会等を設けたいと考えている。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 今年度に学生が提出した毎授業時のコメントシート（非公開）
- 今年度に学生が提出したレポート・試験内容（非公開）
- 今年度に学生が作成したプレゼンテーション資料（非公開）
- unipa での授業アンケート結果